

定例活動 / 3月26日(土)

「第7回 萌木祭り ～テーマ“食”～」

大館 学・伊藤 晶子

恒例となった春の萌木祭りも7回目を迎え、今年も昨年好評だった「食」をテーマに～森の恵みを食す～と題して集いの広場が森のレストランとなりました。もともとは森の邪魔者「竹」を有効に使ってやるうじゃないかとの思いが発端で、竹食器や竹串など什器として、くらぶで焼いた竹炭を燃料とし、またこの時期ならではの早取りタケノコを食材として竹の有効利用で里山管理を見直そうというものです。

さて、当日は準備中に小雨が降り始めましたが、空には明るいところもあったので準備を続行。開会時には、お招きした森のパートナーシップからの17名（宮前の森林くらぶ、みよし里山まもり隊、環境研究所、おかざき自然体験の森）、森くらぶメンバー16名が集まり、雨もやんで賑やかな開会となりました。

午前中は竹林班と山菜班に分かれて活動。竹林班は、什器や竹細工の材料調達を兼ねて、山根口近くの竹林の除伐作業へ。



一方、山菜班は天白ブレーパークの白石さんを顧問に山菜採りに出発。まずは7年前に菌を植え付けたホダ木から、ふっくらとしたシイタケ8個を採取。そのほかミツバ、ノグシ、カラスノエンドウ、セイタカアワダチソウ、ヒメオドリコソウ、ユキノシタ、クコ、ヨモギ、ヤブカンゾウなど13種を摘み取って集いの広場に帰りました。

広場では定番の豚汁ができあがり、竹炭の火の上では野浪さん特製の餅（ヨモギモチも）が焼け、田楽も香ばしく焼き上がっていました。竹林班が戻り、切り出した竹で竹皿を作って料理を盛り昼食です。元プロの松岡さんと五十川さんが山菜を天ぷらにしてくれました。その美味しいこと！さらに中島さんの用意した竹のカッポ酒（安い酒を若竹に入れて一晩置いたもの→特級酒になる？）もあり、本当に盛りだくさんでした。昼食後は、オアシスの森の



梅で作った梅酒を飲みながら、蛭川さんのオカリナ演奏を楽しみました。

午後は、辻本さん指導による竹細工教室に参加者が熱心に竹細工に取り組みました。苦勞してヒゴを曲げて作った竹ひご風車がくるくる回ると大歓声です。



祭り終了後には山根コミセンにて雑木林連絡会の交流会も開かれ、里山の問題について熱心に討議が行なわれました。

小雨が降ったり突風が吹いたり、天気はくるくる変わりましたが、思い切り食べ、しゃべり、思い切り幸せになった森の一日でした。

シリーズ『森の住人たち』①①

～ケラ～

春の夜の鳴き声



*フェノロジー：生物季節（学）。季節的におこる自然界の動植物が示す諸現象の時間的变化及びその気候あるいは気象との関連を研究する学問。

ケラ科

体長 3cm

環境 土中に住む。日本全土。

オタマジャクシとヤゴをテーマにした観察会を毎年春に行っている。子どもたちのカラフルな服装と歓声が、トンボ池の周囲に賑わいをそえる。オタマジャクシの群れをひとすくいで、キャッキョと喜んでる幼い子どもや、手足を泥だらけにして笑顔をふりまいている子どももいる。

「変わったものがいたけど、なんですか」女の子が、両手にそっと包むようにしてもってきた。

「すごいもの見つけたね。なんだと思う？」首をかき上げて、母親の方をふり向く。親も判らないといって首をふる。

「夜、『ジー』と鳴くんだけど、聞いたことあるかな？」

残念なことに、親子共々、全く知らないという。「ちょっと、前足を見て。どんな形をしてい

るかな」まるで、シャベル。いかにも効率よく土中にトンネルを掘って前進できそうな前足だ。低く、ジーと単調な鳴き声は、「ミミズが鳴いている」と思われていた。

ケラは、土の中で生活し、さらに水の中で泳ぐこともできるし、空を飛ぶこともできる。万能選手なのだ。トライアスロンに出場すれば、優勝間違いなし！

さて、このところ私がケラに注目しているのは、ヒメボタルの出現期近くに鳴き始めるからである。ジーという鳴き声が聞こえ始めると、そろそろヒメボタルの観察シーズン開幕のシグナルなのだ。フェノロジー*のおもしろさを、ケラにも教えられたのである。

(文責 自然案内人 近藤 記巳子)